

## 【第14回年次大会 シンポジウム：翻訳から見たジェンダー表現の諸相 要旨】

日本語の英訳に見る照応詞の扱い：  
星新一『ノックの音が』から

矢野安剛

異言語間翻訳でも、知識や眠りの程度を「深い、浅い/deep, shallow」と表現するように、たいていの場合には概念化 (conceptualization) が共有されていて直訳でよい。しかし、「内弁慶」は *bossy at home and timid outside* と説明しなければならないし、「油を売る」は *waste time* と置き換えなければならない。また、桜美林大学町田キャンパスへ来るのに、京王線が重要な場合でなければ *come by the Keio Line train* は *by train* と省略していい。逆に、「畳」は *tatami mat* のように情報を補わなければならない。このように、翻訳には説明、置き換え、省略、付加などの操作が加えられる。

コミュニケーションでは、発信者 (話し手・書き手) は、言語内、言語外コンテキストから受信者 (聞き手・読み手) がメッセージの内容を復元できると仮定した場合、その情報を省略したり、より形式が簡潔で情報量も軽い代用形に置き換える (Yano 1977, 1984)。たとえば、日本語では無標 (unmarked)、すなわち、非強調文の場合、「行きます」のように動作主には「ゼロ形式」を用いる。有標 (marked)、すなわち、強調・対照・指示関係の明確化 (disambiguation) の場合には「私が／は行きます」のように人称詞、コソアド系、述部代用形ダ・デスなどの「代用形」照応詞を用いる。英語では非強調文でも文法上 *I, you, he, she, it, they, do, such, so* などの代用形照応詞を用いる。いずれの場合も、完全形よりも形態が簡潔で、情報量が少ない。「コミュニケーションにおける経済の原則」に基づいた語法である。ちなみに、「ゼロ形式」とは文法法の枠内で Kuroda (1965) が提唱した *zero-pronominalization* を、談話文法の枠組みで Yano (1977) が発展させた「ゼロ照応詞」という概念である。ワインを一口飲んで「ちょっと若いね」と言うように、先行概念が談話の場に顕在している「状況的」なもの、就職面接から戻ってきた息子に母親が言う「どうだった？」のように談話の場には存在しないが聞き手の理解を前提にできる「仮定的」なもの、および「今、ここ、あなた・私」のように談話の時・場・参加者が先行概念の役割を担う「言語運用的」なものがある。

あまり、文学的技巧を駆使しない星新一のショートショート『ノックの音が』で、日本語の英訳の場合にどのようなストラテジーが用いられているかを見てみると、消えた性差性を *he/she, his/her, him/her* などのト書きで補っている。「有標」から「無標」への流れが普遍的な傾向だという見方に立てば、日本語のゼロ形式は英語の代用形式より情報の余剰性が少ない。たとえば、”*John put his hands in his pockets.*”は「ジョンはポケットに手を入れた」より *his, his* など、よほどの特殊なコンテキストがない限り、その指示関係は明白であり、余剰と言える。ただし、「有標」は完全に消えるのではなく、必要な場合に使われる「任意的」[+optional]な選択として残るであろう。たとえば、現在ではカバータムとして「俳優」が使われているが、女性であることを示したい時は「女優」を使うし、若い女性は通常終助詞の「わ」は使わないが、女性性を強調したい時は使う。本学会がテーマとしている性差語もこの大きな流れのなかでだんだんと[+義務]から[+任意]な用法へと変化していくのではないだろうか。

[参考文献]

Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. PhD thesis, MIT.

Yano, Y. (1977) *Intersentential pronominalization: A Case Study from Japanese and English*. PhD thesis, University of Wisconsin.

矢野安剛 (1984) 「英語の代名詞化と日本語のゼロ代名詞化：その平行性」『学術研究』33号、57-69.

[資料]

星伸一(1972)『ノックの音が』講談社.

Hoshi, S. (Trans. S. H. Jones, 1984) *There Was a Knock*. Kodansha International.

(やの やすかた・早稲田大学 名誉教授)